

東洋への「玄関口」を訪ねて

石 渕 巖 生

一九七六年六月六日、緑と花の町バンクーバーに一泊した私たち、尾鷲市商工会議所の一行十四人は、翌七日姉妹都市プリンス・ルバート訪問のため、郊外の小さな空港からCP航空に乗った。北極圏に近い万年雪の山脈を遠くに望みながら、森と雪と、複雑に入りこんだ入り江が織りなす、すばらしい景観の上を北上すること一時間余、プリンス・ルバート

空港のある小島に着陸した。空港には、商業会議所のドッド会頭、赤いブレザーを着た観光課の女子職員、日系のタサカ婦人等が、胸に「いらっしやいませ」の大きなリボンをつけて、私たちを待って下さっていた。

空港で頂いた資料袋の表に、大きくザ・ゲイトウェイ・シティと印刷されている。なるほど当市は、イエローヘッド・ハイウェイの西の終点であり、カナダ国鉄道の終着駅でもある。

また資料の地図を見て再認識したことがあるが、米領のアラスカが、太平洋岸ですつと南下して

●プリンス・ルバート

プリンス・ルバートに接している。そして今や、最も期待され重要視されているゲイトウェイ・シティとしてこの町の役目は、東洋に対する最重要港である、というのがカナダ政府およびBC州政府の認識である。

市の差し回しのバスに乗って、フェリーの上から市街地を一望。山の迫った斜面に開けた小さな美しい街並みは、尾鷲市と共通した点が多いが、この港の方がより広い。岸壁まで切り込んだ深さがあるのは、クレイターによる港だからだ。宿舎のクレスト・モーターホテルで早速市長主催の歓迎カクテル・パーティーがあり、一度尾鷲市にいられたことのあるレスター市長を中心に、婦人会の方々、日系の方々も交わり、両市長の記念品の交換等、楽しい雰囲気であった。

続いて夕刻から、海辺のレストランで商業会議所の夕食会にお招き頂いた。一部会議に時間を割かれたが、司会の洗練されたリード、全員の簡潔な発言等、感銘したものである。レスター市長も、ドッド会頭も、席上、両国の、特に産業面の提携を力説され、日本のみならずアジア諸国に対する積極的な気持ちを感じた。

ホテルに帰ったあと、待ちうけて下さった日系人家族の方々と夜更けまで語り合った。水産関係の仕事をしている人が多いようで、人種差別の全くない国柄が言葉の端々に感じられ、心からうれしく思った。

翌八日は早朝から会議所差し回しのバス二台に分乗、一班は林業関係、特にパルプ工場、他班は水産関係、特に冷凍加工工場の見学に廻った。ニメートルもあるオオヒラメの山積みは特に見ごたえがあった。昼食は全員合流して、ロープウェイで裏山に登り、すばらしい眺望を楽しみながら、厚切りのサーモン・サンドイッチに舌鼓をうった。心からの名残りを惜しみながら、午後の便で皆さんとお別れしたのであるが、あれからちょうど六年の歳月が流れた。

私の事務所の机の引き出しの奥に、小型の名刺入れがある。その中にある時々の街で、お世話になった方々の名刺を大切に保存してある。

いま日本向けBC州北東部の積み出し港を建設中のプリンス・ルバートは、州北西岸のカイエン島北部に位置する、世界でも指折りの天然漁港として有名。特にオオヒラメの漁獲で知られるが、ニンシ、サケ、トラなどもとれる。大平原で収穫された小麦の集積・輸送港でもある。

尾鷲市がそのプリンス・ルバートと姉妹提携したのは一九六八年九月。尾鷲港が、三重県南部の開発拠点として重要港湾などの指定を受けたのを機会に、市民の国際的視野を広げ、産業、観光の発展を図る目的で、同市と性格の似たプリンス・ルバートと接触したのがきっかけであった。



尾鷲市を訪問したプリンス・ルバート市ライオンズクラブの会員。市長室で。

両市は、提携以来、児童画の交換展示、相互訪問などを通じて、交流を深めている。

